

## Commentaries of "Suou no naishi shu"(2)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-03-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Ono, Junko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24517/00065770">https://doi.org/10.24517/00065770</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 『周防内侍集』注釈(二)

大野 順子

Commentaries of “Suou no naishi shu,” (2)

Junko ONO

郭公

12 夜を重ねまちかね山の郭公雲のよそに一声ぞきく

【底本】

ほととぎす

よをかさねまちかね山のほととぎすくもあのよそにひとこゑぞきく  
【他出】

○『新古今集』夏・二〇五

寛治八年、前太政大臣高陽院歌合に、郭公を 周防内侍

夜を重ねまちかね山の時鳥雲のよそに一声ぞきく

○『高陽院七番歌合』郭公・一九  
三番 左勝 周防内侍

夜を重ねまちかね山の郭公雲のよそにて一声ぞきく

右 頭綱朝臣

明くるまでまちかね山の郭公今日も聞かでや暮れむとすらん

この歌どもは、ただ同じやうにのみ聞こえ侍るを、左は郭公聞きたる歌なり、右のはまだ聞かねば、さきさきも聞きたるをぞ勝るとは申すめる

○『和歌童蒙抄』夏・題心難例・九二五

夜を重ねまちかね山の郭公雲のよそにて一声ぞきく

あくるまで待ちかね山の郭公けふもきかやくれむとすらむ

大殿寛治八年歌合、十番左周防内侍、右頭綱。判云、左

右唯おなじやうなれど、左はきたりとて勝とあり。

○『袋草紙』・四四八

賀陽院七番歌合 寛治八年八月十九日 判者経信卿

三番 郭公

勝 周防内侍

夜を重ねまちかね山の郭公雲のよそにて一声ぞきく

頭綱朝臣

明くるまでまちかね山の郭公今日も聞かでや暮れんとすらん

共にただ同じ事に侍るを、左は郭公聞きたり。右はまだ聞かねば、前前も聞きたるをぞ勝と申すめる。予今これを案ずるに、在納言家歌合に、聞く歌に合ひて聞かざる歌、あるいは勝あるいは持なり。  
○『歌枕名寄』待難山・新古三 時鳥・四五〇一

夜を重ね待かね山の郭公雲のよそに一声ぞきく

## 【通釈】

『高陽院七番歌合』にて、「郭公」（題で詠んだ歌）

幾夜も待ちかねた待兼山の郭公が、空のかなたで（鳴いた）一声を聞くよ。

## 【参考歌】

①郭公いたくな鳴きそひとり居ていの寝られぬに聞けば苦しも

（拾遺集・夏・一二〇・大伴坂上郎女）

②一声はさやかに鳴きて郭公雲はるかに遠ざかるなり

（千載集・夏・一五九・源頼政）

③郭公待つ夜の数をしらねばや二声とだに聞かせざるらん

（山家五番歌合・五番左・二九・藤原敦隆）

④夜を重ねまつらの山の郭公心づくしの曙の声

（御裳濯和歌集・夏・二〇九・大中臣公親）

⑤来ぬ人をまぢかね山のよぶこ鳥おなじ心にあはれとぞ聞く

（堀河百首・喚子鳥・二二二・肥後）

⑥郭公まぢかね山の一声は聞くにつけても恨めしきかな

（中宮亮重家朝臣歌合・郭公・十番右・四八・顕昭）

⑦かぎりなき雲のよそになりぬとも人を心におくらさむやは

（古今集・離別・三六七・よみ人しらず）

## 【語釈】

○郭公：『高陽院七番歌合』の歌題。『高陽院七番歌合』については一番【語釈】参照。「郭公」は、五月ごろに渡来し、八、九月頃南方に帰っていく渡り鳥として捉えられている。林のなかを飛び回りながら鳴くことから、その声と結びついて夏歌に詠まれる。独り寝で寝付けないのにそんなに鳴かないでほしいと歌う①のように、声に関わって詠まれた。『高陽院七番歌合』の判詞では、本詠と顕綱詠はほとんど同じようだとしつつも、郭公の歌は声を聞いた

ことを詠んだほうが勝るとして、本詠を勝ちとした。また、郭公の声はなかなか聞くことができないという読み方が定着していくと、一声鳴いて去ったと詠んだ②や、二声めを聞かせてくれないことを歌った③のように、「一声」にこだわるようになる。○夜を重ね：郭公の一声を待ち明かして、幾夜も過ごして。句に「夜を重ね」と置き、山の名に「待つ」を掛けた④は本詠に学んだ作。○まぢかね山の郭公：待ちかねた待兼山の郭公。「待兼山」は摂津国の歌枕で、大阪府豊中市待兼山町にある丘陵のこと。郭公を「待ちかねる」と、地名としての「待兼山」が掛詞。古くは『古今和歌六帖』八七一のように、待兼山と呼子鳥とが詠みあわせられた。その流れを汲んで、来ない人を待ちかねて鳥が呼ぶ声をあげると詠んだ⑤などがある。

『高陽院七番歌合』の周防内侍と顕綱の番は、いずれも待兼山に郭公を詠みいれているところに新しさがあつた。のちに⑥の歌は判詞で「まぢかね山の一声聞くにつけても恨めしきなど言へる、女の歌とおぼえて優には聞こゆるを、また聞き慣れたる心地もすれば、なほ花橘をまさると可申」と評されて負けた。○雲のよそに：大空の向こうで。「雲のよそ」には、ふだんは内裏で過ごしている周防内侍が、宮中から離れた摂関家の催しに参加していることも含意する。⑦は、『大和物語』一六八段と『遍昭集』では、仁明天皇に殉じて出家した遍昭が宮廷を遠く離れた自身を歌ったものとされる。

○一声ぞきく：一声を聞きますよ。この句は、『高陽院七番歌合』のなかで周防内侍・藤原通俊（二六）・讃岐（二二）の三人が用いている。

## 【補説】

一番歌から一四番歌まで、晴れの場で詠まれた歌が並ぶ。『高陽院七番歌合』は寛治八年（一〇九四）八月一日、『鳥羽殿前裁合』は嘉保二年（一〇九五）八月に開催された。一〇番までの春歌群につづいて、一番以降に秋開催の物合歌群が接続している。こ

の物合歌群の歌題は、桜・郭公・月・萩と季節を巡るように並べられている。ところが、一五番歌から三首は夏の題である。「あやめ」が並び、一八番から再び秋歌群がはじまる。夏歌あたりは未整理のままであったか。

13 つねよりもみかさの山の月影の光さしそふあめの下かな  
月

【底本】

つねよりもみかさの山の月かけのひかりさしそふあめのしたかな

【他出】

○『新勅撰集』賀・四四五

寛治八年八月、高陽院家歌合に、月歌 周防内侍

つねよりも三笠の山の月影の光さしそふあめの下かな

○『高陽院七番歌合』月・三三三

三番 左勝 周防の内侍

つねよりも三笠の山の月影は光さしそふあめの下かな

右 頭綱の朝臣

石橋の神の契れるかひもなくまなく照らす秋の夜の月

右の、石橋の神の心よまれたるは、葛城の神にや侍らん、さらばこの橋をばえ渡さじとこそ言ひ伝へたれ、月には渡さじとやはあらん、月のあかきが昼のやうなればとあらばこそ、さも見えぬ、さらに月の限りを詠まれたれば、神もさやは言ひしとおぼさんと思ふ給ふれば、左の勝ちにや侍らん

【通釈】

『高陽院七番歌合』にて、「月」(題で詠んだ歌)

ふだんよりも三笠の山にかかる月光が、輝きを増し加える世の中で

あるよ。

【参考歌】

①みかさ山さすがに影にかくろへてふる甲斐もなきあめの下かな

(詞花集・雑上・三三五・源仲正)

②つねよりも照りまさるかな山の端の紅葉をわけて出づる月影

(拾遺集・雑上・四三九・紀貫之)

③つねよりも月の光のさやけきは天の河原に舟や来ぬらん

(江帥集・九五)

④めづらしき光さしそふさか月はもちながらこそ千代もめぐらめ

(後拾遺集・賀・四三三・紫式部)

⑤曇りなき昔を今にみかさ山光さしそふ峰の月影

(洞院撰政家百首・月・六五〇・藤原範宗)

【語釈】

○月：『高陽院七番歌合』の歌題。『高陽院七番歌合』については一一番【語釈】参照。「月」はさまざまな季節と結びつくが、ここでは秋の景物とされている。○つねよりもみかさの山の月影の…ふだんよりも三笠の山にかかる月光が。「三笠山」は、藤原氏の氏神である春日大社のふもとにある山。天皇の座である高御座には「御蓋」(高貴な人物にさしかける天蓋のこと)があることを掛けて、「御蓋山」とも。また、天皇を守護する「近衛府」の異名ともなった。山の名を「笠(傘)」との掛詞にしたり、「雨」の縁語として歌に詠まれやすく、近い時期にも源仲正が「傘」の縁語として「さす」・「降る」・「雨」を①に詠みこんでいる。「あまの原ふりさけみれば春日なる三笠の山に出でし月かも」(古今集・羈旅・四〇六・阿倍仲麻呂)の影響から「月」とともに詠まれることも。月光がいつもより輝いているようすは、古くは②の屏風歌や、近くは後三条院の御代に「舟のうちの月」題で詠まれた③の歌などにある。○光さしそふあめの下かな…輝きを増し加える世の中であるよ。「天の下」は、

天下や世の中のこと。「光さしそふ」は、上の句に「三笠山」が詠み入れられていることから、撰録の臣として皇室を支える藤原撰闕家の権勢が、月の輝きが増すようすに重ねられている。撰闕家の歌合で詠み出された歌として、本詠には撰闕家に対する慶祝の思いが込められている。中宮彰子が敦成親王を産んだことを言祝ぐ④のなかでも、「光さしそふ」と歌われる。のちに、撰闕家主催の百首歌で三笠山に月の光が「さしそふ」ことを詠んだ⑤でも、撰闕家の威光を表現している。「差し」と「雨」は「笠」の縁語。

## 【補説】

一一〜一三番歌まで『高陽院七番歌合』の勝ち歌のみが入集している。同時に詠じた五首のうち、他者から評価を受けた歌のみが選ばれているあたりに、本集の秀歌撰的な傾向をよみとってよかるう。

## 女院の前裁合、萩

## 14 朝な朝な折れば露にぞそぼちぬる恋の袖とやいはれ野の萩

## 【底本】

女院のせんさい合はき

あさな／＼をれはつゆにそゝほちぬるこひのそとやいはれのゝはき

## 【他出】

○『鳥羽殿前裁合』

二番左 同じ人

朝な朝な折れば露にぞそぼちぬる恋の袖とやいはれ野の萩

右 女院の大式

薄く濃くわきてや露も置きつらむまのの群萩おのがいろいろ

## 【通釈】

女院（郁芳門院）の前裁合、（歌題は）萩

（あなたのところから帰る）朝ごとに、（かき分けてゆく萩を）折

るといつも露でびっしょりと濡れてしまおうよ。（これを、恋に泣き濡れた）袖だと言われるのだろうか、磐余野の萩よ。

## 【本歌】

世をそむきてのち、磐余野と言ふ所を過ぎてよめる

いはれ野の萩の朝露わけゆけば恋せし袖の心地こそすれ

（後拾遺集・秋上・三〇五・素意法師）

## 【参考歌】

①折りて見れば落ちぞしぬべき秋萩の枝もたわわに置ける白露

（古今集・秋上・二二三・読み人知らず）

②ます鏡手にとりもちてあさなあさな見れども君にあく時ぞなき

（拾遺集・恋四・八五七・柿本人麻呂）

③おく露を別れし君と思ひつつ朝な朝なぞ恋ひしかりける

（貫之集・七八七）

白河院、鳥羽殿にて前裁合せさせ給けるによめる

周防内侍

④朝な朝な露重げなる萩の枝に心をさへもかけて見るかな

敦輔王

萩の葉にこと問ふ人もなきものを来る秋ごとにそよとこたふる

（詞花集・秋・一一六／一一七）

⑤露けて我が衣手は濡れぬとも折りてをゆかん秋萩の花

（拾遺集・秋・一八二・凡河内躬恒）

⑥なき事をいはれの池のうきぬなは苦しき物は世にこそありけれ

（拾遺集・恋二・七〇一・よみ人しらず）

## 【語釈】

○女院の前裁合：郁芳門院主催の『鳥羽殿前裁合』。「女院」は郁芳門院媼子内親王のこと。媼子内親王（承保三年（一〇七六）四月五日〜永長元年（一〇九六）八月七日 二一歳）は、白河天皇鍾愛の第一皇女で、母は中宮賢子。承暦二年（一〇七八）三月に准三宮、

同年八月に伊勢齋宮に卜定。応徳元年（一〇八四）九月に母後の崩御によって退下。寛治五年（一〇九二）正月、同母弟である堀河天皇の准母となる。同年八月、新造の六条院に父白河院とともに移り、崩御まで父と同居。寛治七年（一〇九三）正月に院号宣下。郁芳門院は、未婚の内親王が准母として立后し、院号を受けた初例。郁芳門院が崩じた二日後に、悲しみのあまり白河院が出家した。永長元年には田楽が大流行し（永長の大田楽）、そのさまは『中右記』、『洛陽田楽記』、『古事談』などに記録されている。田楽を愛好した郁芳門院の御前でも七月一二日に田楽が行われ、その後間もなく女院が崩じたことから、田楽の流行が崩御の前触であったともされた。齋宮在任中の永保三年（一〇八三）一〇月に『媿子内親家王歌合』を主催。その後、寛治七年五月五日の『郁芳門院根合』、嘉保二年（一〇九五）八月の『鳥羽殿前裁合』など、白河天皇の後見を受けて文化的な催しの中心にいた。ただし、女院自身の歌は『玉葉集』（雑・一九九〇）に一首が残るのみ。本詠が詠まれた「前裁合」は、嘉保二年八月二八日に、白河上皇が内親王のために鳥羽殿で催した『鳥羽殿前裁合』（白河院鳥羽殿前裁合・郁芳門院前裁合・郁芳門院媿子内親王前裁合とも）をさす。歌題は、萩・女郎花・薄・萩・菊の五題。各題二番、十番二十首で構成されたと考えられるが、現在は『廿卷本類聚歌合』の断簡七葉によって一六首が伝わるのみ。判者は源俊房。講師は左方宗忠、右方能俊。歌人は、周防内侍のほか女院大式・女院安芸・宗通・家道・公実・顕季・行宗・俊実・匡房・顕綱・通俊・敦輔王母・顕家大式妻など。『中右記』嘉保二年八月二八日条、『袋草紙』、『古今著聞集』（卷十九）に当日の記録が残る。本歌合については、萩谷朴『平安朝歌合大成』三卷（一九九六年二月、同朋舎出版）参照。○萩：「萩」は、マメ科の植物で、秋の七草の一つ。秋に花を咲かせて、枝はやわらかに曲がる。和歌では、鹿や露ととりあわせられることが多く、①のように萩の葉に多くの

露の置くさまが詠まれた。また、女性に喩えたり、恋を歌うときにも用いられる。○朝な朝な：朝ごとに。朝ごとにあなたを見て飽きることはないかと歌う②のように、早くから和歌に用いられた。「朝な朝な」置く「露」によって、離れている人への慕わしさを詠んだものとしては③が残る。周防内侍には、『詞花集』の詞書と配列から本歌合に出詠されたと考えられるもう一つの萩の歌④があり、ここでも内侍は「朝な朝な」と詠みだして、萩におく露の重さに思いの深さを重ねる歌を詠んでいる。補説参照。○折れば露にぞそぼちぬる：萩を折るといつも、その枝においた露で袖がびっしり濡れてしまうよ。周防内侍は、帰り道にいつも袖を濡らす萩の露にこゝと寄せて、後朝の別れに泣き濡れる袖を表現し、別れを惜しむ男の心を詠じた。三句切れ。歌ことばとしての「露」は、しばしば秋歌に用いられたが、秋風に吹き落とされる露の連想によって、涙にも喩えられた。秋萩を折ることで袖が濡れると歌う⑤が本詠に先行して詠まれている。○恋の袖とやいはれ野の萩：露に濡れた袖を、恋に泣き濡れたと言われるのだろうか、磐余野の萩よ。「磐余」は大和国の歌枕で、現在の奈良県桜井市あたり。萩や露にかかわる名所。本詠と同じく、「磐余」と「言はれ」が掛詞とされる例も多く、⑥では謂われのない恋の噂を立てられたことを言うところで「いはれ」が使われている。本詠は、秋萩を分け行くときに濡れた袖から、在俗時の後朝の袖を思い起こした素意法師詠を本歌とする。初句に「朝な朝な」と詠み入れることで、素意法師にとって過去となつてしまった恋を、今現在のこととして歌う。

#### 【補説】

周防内侍には、本詠と同じく『鳥羽殿前裁合』で詠んだとみられる「萩」詠がもう一首ある。参考歌④にあげた歌であるが、この歌が「萩」題一番右歌であった可能性と、本集一四番歌との関係について述べておきたい。

『鳥羽殿前裁合』本文にみえる一四番歌の作者名は「おなじ人」である。これを素直にみるならば、一番右歌が周防内侍詠となる。現在、前裁合の一番は失われているものの、『詞花集』一一六番歌の詞書に「白河院、鳥羽殿にて前裁合せさせ給けるによめる」とあり、『鳥羽殿前裁合』七番右歌（「萩」題）であることが確かな敦輔王詠（詞花集・一一七）と二首連続している④が、前裁合の一番右歌であったと推測される。二番四首しかない「萩」題に周防内侍詠が二首、しかも右左に一首ずつ選ばれることがあるのかという問題が出てくるが、これは当該前裁合の本文が、提出者ではなく代作者の名を作者として記録していることで解消されよう。

鳥羽院前裁合に越前守家保に給ふ歌二首、左方、萩不入  
萩が花散るも散らぬもおしなべてさながらおほき秋の野辺かな  
薄

秋風になびく薄と知りながらいくたびそこに立ちとまるらん  
同じ前裁合に因幡守にかはりて右方に奉る歌二首、

萩いらす  
秋の夜は人まつとしもなければ萩のは風におどろかれつつ  
菊いる

千歳まで君がつむべき菊なれば露もあだには置かじとぞ思ふ  
（六条修理大夫集・八〇一一）

六番 左かつ 修理大夫頭季  
秋風になびく薄と知りながらいくたび野辺に立ちとまるらむ  
（鳥羽殿前裁合・薄）

鳥羽殿前裁合に菊をよめる 修理大夫頭季  
千歳まで君がつむべき菊なれば露もあだにはおかじとぞ思ふ  
（金葉集二度本・秋・二四二）

『六条修理大夫集』の詞書によれば、『鳥羽殿前裁合』に参加する二人の子どもたちのため、頭季は少なくとも四首代作している。これらのうち、左方の家保のために詠んだ薄歌と、右方の長実のために詠んだ菊歌が前裁合に選ばれたことが詞書から明らかである。これを前裁合の本文と照らし合わせてみると、六番左歌は、頭季の家集通りならば越前守家保の歌として提出されたはずであるのに、前裁合本文では修理大夫頭季となっている。前裁合の二十番の本文が欠けているため確認することはできないが、『金葉集（二度本）』二四二番歌の詞書から推して、おそらく二十番右歌として採録された歌は、六番左歌と同様に頭季の名が作者として書き入れられたと推測される。

さきあげた『詞花集』一一七番歌の敦輔王詠は、前裁合本文では七番右歌として「伯敦輔王母」となっていて、母の代作歌であった可能性が考えられる。また、二番右歌の作者名「女院の大式」の脚注に「通俊歎」とあるのも、姪の大式の歌を通俊が代作したかと思われ、当該前裁合の執筆者が疑っていたことを反映したものと思われる。

これらのことから、④は周防内侍が誰かの代作をして一番右歌に選ばれたものの、本前裁合本文には代作者本人の名前が記録されたために、二番左歌の作者名が「おなじ人」になった可能性がみえてくる。

また、一四番歌と④が同時詠であるならば、ともに「朝な朝な」と詠み出し、萩の朝露に心を寄せる二首は恋の贈答歌として詠むことも可能になってくるのではなからうか。

④は、一四番歌と同じく「朝な朝な」と詠み出した上で、「毎朝、びっしりととりついた露が重そうな萩の枝に、私の涙がちな心を託して見ておりますよ」と詠じる。この一首を単独で鑑賞するならば、秋の景に心寄せをしているようにみえるが、後朝の別れを嘆く男歌となつている一四番歌に応えたととるならば、「露重げなる萩の枝

に心をさへもかけ「つつ景を眺める④は、男の袖を濡らす萩の露は、あなたとの別れを嘆く私の涙に他ならないのだと怨じてみせる女の答歌となる。左方と右方両方の「萩」題を詠む機会を得た周防内侍が、我が歌同士で番が作られる可能性を想定しつつ二首を贈答歌めいた形で詠み出した可能性をみておきたい。

心ならず籠もりゐて年も隔たりゆくを、「なかあからさまにだに」など、内わたりよりありしかば、五日

15 そぼちつつ引きかくれども甲斐なきは数ならぬまのあやめなりけり

【底本】

ころならすこもりゐてとしもへたよりゆくをなかあからさまにたになど内わたりよりありしかは五日

そほちつゝひきかくれともかひなきはかすならぬまのあやめなりけり

【他出】

○『新統古今集』雑上・一六七

年ごろ籠もりゐて侍りけるに、五月五日、内わたりの人のもの

とより、「なかあからさまにも」など言ひて侍りければ

周防内侍

そぼちつつ引きかくれども甲斐なきは数ならぬまのあやめなりけり

【通釈】

本意にも（内裏を退出して）籠もりつづけて年月も過ぎていくのを、「どうしてほんのちよつとだけでも（お戻りにならぬのでしょうか）」と、宮中から便りがありましたので、（五月）五日に。

びつしよりと濡れながら掛けても甲斐がないのは、とるに足りない

沼のあやめです。よ。（泣き濡れて隠れている私は、そのあやめのよなものですから、心に掛けて頂いたところで……）

【参考歌】

一条院御時、皇后宮に清少納言はじめて侍りける比、三月ばかり二、三日まで侍りけるに、かの宮より遣はされて侍りける 皇后宮定子

①いかにして過ぎにしかたを過ぐしけんくらしわづらふ昨日今日かな

御返事 清少納言

雲の上もくらかねける春の日を所がらともながめつるかな

（千載集・雑上・九六六／九六七）

三月ばかりに、宮の弁のおもと「いつか参り給ふ」など書き

②憂きことを思ひ乱れて青柳のいと久しくもなりにけるかな

返し

つれづれとながめふる日は青柳のいと憂き世に乱れてぞふる

（紫式部集・五九〇六一）

③あやめ刈り君は沼にぞまどひける我は野にいでて狩るぞわびしき

（伊勢物語・五二段・九八）

葉玉おこすとて

しのびつるねぞあらはるるあやめ草いはぬに朽ちてやみぬべければ

返し

④今日はおく引きけるものをあやめ草わがみがくれに濡れ渡りつる

（紫式部集・六三／六四）

村上御時、上にのぼりて侍りけるに、うへ大殿籠りにければ、帰りおりてよみ侍りける 齋宮女御

⑤隠れ沼に生ふるあやめのうきねして果てはつれなくなる心かな



（後拾遺集・雜一・八七一）

養ひ侍りけるむすめに、五月五日薬玉奉らせ侍りけるに、代はりてよみ侍りける 右近大将道綱母

⑥隠れ沼におひそめにけるあやめ草深き下根を知る人もなし

御返し 東三条院

あやめ草根にあらはるる今日こそはいつかと待ちしかひもありけれ  
（新勅撰集・雜一・一〇六一／一〇六二）

⑦逢はぬまのみぎはに生ふるあやめ草ねのみなかるる昨日今日かな  
（実方集・二五八）

⑧すさめねど心の限りおひたるは人知らぬまのあやめなりけり  
（和泉式部統集・三三四）

### 【語釈】

○心ならず籠もりゐて年も隔たりゆくを：不本意にも内裏を退出して籠もりつづけて月日が過ぎていくのを。詞書からだけではどういった理由なのかわからないが、何か思うに任せぬことがあって、周防内侍はしばらく内裏を退出していた。○「**なかあからさまにだに**」など、**内わたりよりありしかば**：「どうしてほんのちよっとだけでもお戻りにならないのでしょうか」と、宮中から便りがありましたので。「**内わたり**」は、内裏または天皇をあらわす。周防内侍が一五番歌を送ると、返歌（一六番）は「大盤所より」返されている。本詠は、主上に仕える同僚女房から出仕についての問い合わせがあったのに対し、周防内侍が歌を詠み送ったもの。あるいは、主上の内意があつて行われた問い合わせであつたか。このときの主上が誰であつたかは不明。類似する例として、①では、里下がりをして清少納言に対し、皇后宮定子から出仕を促す歌が送られている。②で里下がりをしていた紫式部に対し、再出仕の時期を尋ねた宮の弁のおもとの贈答が本詠の状況に近い。○**五日**：歌に「あやめ」が詠みこまれていることから五月五日。何年のことかは不明。五月五

日は端午の節句。五月五日に粽と雉を贈りあつた際に詠まれた③や、薬玉を送るときに添えられた④の贈答歌のように、五月五日にはあやめに関連した歌が詠まれた。○**そぼちつ**：びっしりと濡れながら。あやめの根を掛ける五月五日の詠ということで、水辺で濡れている菖蒲に、「心ならず」退出して涙にくれる我が身を重ねている。薬玉に添えられた歌に対して④は、水に濡れたあやめのように涙がちであると歌う。○**引きかくれどもかひなきは**：掛けてもその甲斐がないのは。五月五日の歌ということであやめを「掛く」に、私を心に「掛く」が掛けられていて、取るに足りないあやめのような私を気に掛けて音信をくださったと歌っている。また、「かくれ」には、周防内侍が泣き濡れつつ里に「隠れ」ていることも重ねられているよう。沼に生えたあやめは、⑤や⑥にあるように「隠れ沼」に生えているあやめ——人目につかないところに生えているあやめから、取るに足らない身の上を表す。「引き」は「あやめ」の縁語。○**数ならぬまのあやめなりけり**：取るに足らないような沼のあやめですよ。「あやめ」はサトイモ科のショウブのことで、初夏に咲く。芳香があるあやめは邪気を払うものとされ、端午の節句には葉を屋根に葺いたり、薬玉に添えた。また、泥中に長く這う白い根を贈り物としたり、この日に根合を催した。「沼」は、水が流れずたまっているところ。「数ならぬま」と「沼」が掛詞。類似する表現としては、「逢はぬま」と「沼の汀」が掛けられている⑦や、「人知らぬま」と「沼のあやめ」を掛けて、誰にも知られない間に沼に生えた菖蒲を歌う⑧などがある。

### 【補説】

本詠から一七番歌まで、あやめ詠が続く。そのあとは、八月十五夜や菊、紅葉などが詠まれるので、「あやめ」詠三首は夏歌として配列されたものとみてよからう。

返し、大盤所より

16 そぼつらん沼のあやめは名のみして思はぬことをかくるとぞ見  
る

【底本】

返し大はんところより

そぼつらんぬまのあやめは名のみしておもはぬ事をかくるとぞみる

【通釈】

返歌は、台盤所（の女房）から

びつしよりと濡れているとかいう沼のあやめは名前ばかりのこ  
とで、思わぬことをお心に掛けていますよ。

【参考歌】

①さざなみやあふみの宮は名のみして霞たなびき宮ぎもりなし

（拾遺集・雑上・四八三・柿本人麻呂）

②昔よりあさの衣は名のみして柳色なる年をふるかな

（公任集・四二三・きんさだの中將）

③うくて世にふるのの沼のあやめ草ねかくる袖はかわくまもなし

（相模集・五三八）

④あぢきなくとはぬにしもぞ頼まるる思はぬことをせぬかと思へば

（続詞花和歌集・恋中・五七九・越後）

【語釈】

○返し、大盤所より：返歌は、台盤所の女房から。「大盤所」に  
いては四番【語釈】参照。本詠は宮中の大盤所に控えていた女房が  
詠じた。一五番参考歌②の贈答歌は、里下がりをしていた紫式部に  
再出仕を促した宮の弁のおもとに対して紫式部が返歌した。一六番  
歌もそれとおおよそ同じ状況で、「などかあからさまにだに」と言  
い送ってきた人が本詠の作者であると断ずることはできないが、贈  
答の構図は似ている。○そぼつらん沼のあやめは名のみして：濡れ  
ているとかいう沼のあやめは名前ばかりのことで。一五番歌を受け

て「そぼつらん沼のあやめ」と詠み出して、取るに足りない存在と  
いうのはあなたの実際とは合わない、と切り返している。「〜は名  
のみして…」と詠むことで、「〜」で描写した状況は名ばかりで、  
実際には「…」という状況にあることを示す。「沼のあやめ」は、  
一五番【参考歌】⑧や、物憂いまま過ごすので泣く音のかかる袖は  
乾かないのだと歌う⑨などに見られるものの、用例はそれほど多  
いものではない。○思はぬことをかくるとぞみる：思わぬことを心に  
掛けているのだなあとと思う。「数ならぬまのあやめ」と、周防内侍  
が自身を取るに足りない存在だと詠んだのに対し、私が思ってもみ  
ないことを気にしているとす。「かくる」は、あやめの縁語。な  
かなか訪れない恋人の訪れを、ついあてにしてしまうことを歌った  
④で「思わぬこと」が用いられている。

17 いかでかくねを惜しむらんあやめ草うきには声もたてつべきよ  
を  
ものへ行く道に、菖蒲刈る所あるを、「長き根やある」と  
車より乞ふに、いみじう惜しむ気配なれば

【底本】

ものへゆくみちにさうふかる所あるをなかきねやあるとくるま  
よりこふにいみじうをしむけはひなれば

いかでかくねを、しむらんあやめ草うきにはこゑもたてつべきよ  
を

【他出】

○『詞花集』雑上・三三〇

物へまかりける道に、人の菖蒲を引きけるを「長き根やあ  
る」と乞はせけるを、惜しみければよめる 周防内侍  
いかでかくねを惜しむらんあやめ草うきには声もたてつべきよ  
を

## ○『後葉和歌集』雑二・五二六

物へまかりける道に、人の菖蒲を引きけるを見て「長き根やある」と乞ひけるを、惜しみければ 周防内侍

いかでかくねを惜しむらんあやめ草うきには声も立てつべきよに

## 【通釈】

あるところへ行く途中に、菖蒲を刈っているところがあるので、「長い根はありますか」と車の中から求めたところ、たいそう惜しむようすなので、

どうしてこうも（泣く「音」を惜しむかのように）、あやめ草の根を惜しむのでしょうか、つらさにはきつと声をあげてしまっただろう世の中であるのに。

## 【参考歌】

①世の中のうきに生ひたるあやめ草今日は袂にねぞかかりける

（後拾遺集・雑三・九九四・藤原隆家）

②うきに生ひて人も手ふれぬあやめ草ただいたづらにねのみ泣かれ

（和泉式部集・五七六）

③なべて世のうきになかるるあやめ草今日までかかるねはいかが見

（新古今集・夏・二二三・上東門院少将）

④しのべとやあやめも知らぬ心にも長からぬよのうきに植えけん

（拾遺集・哀傷・一二八一・藤原道兼）

播磨の守の久しう対面したまはで、上に聞こえ給ひける

⑤あはぬまのうきにおひたるあやめ草袂にかかるねをだにも見よ

（定頼集・八一）

## 【語釈】

○ものへ行く道に、菖蒲刈る所あるを…あるところへ行く途中に、菖蒲を刈っているところがあるので。「菖蒲」は歌に詠まれた「あやめ草」のこと。「あやめ」は一五番【語釈】参照。○いかでかく

ねを惜しむらん…どういうわけでこのように、泣く音を惜しむかの

ように、根を惜しまれるあやめ草なのだろうか。「かく」は菖蒲の長い根を求めたところ、ひどく物惜しみされたことを指す。「掛く」は「あやめ」の縁語。「音」と「根」の掛詞。「ねを惜しむ」という句は周防内侍以前には残らず、のちに『宝治百首』（待郭公・隆祐・八七〇）や『深心院関白集』（一五）の郭公の「鳴く音」を惜しむ歌で詠まれた。○うきには声もたてつべきよを…つらさには、きつと声をあげてしまっただろう世の中にあつて。つらさに耐えかねて声（泣く「音」）をあげてしまっ、そんな世の中に生きているというのに、つらさを堪えるように「ねを惜しむ」のかと歌う。「漚」と「節」は「あやめ」の縁語。「漚」は、泥深い地のことで、しばしば「憂き」が掛けられる。世の中の憂さと漚に生えたあやめをかけて詠じた①や、誰の手も触れない泥地の菖蒲のようにただ一人泣いていることを歌う②、物憂いわが身の上を泥地の菖蒲に喩えた③など、用例は多い。あやめの「節」が詠まれることは珍しい。遣り水に菖蒲を植えて亡くなった息子を哀悼して詠んだ④のなかで、「長からぬ世」（夭折したこと）と、泥土に植えられたあやめの「長からぬ節」とを掛けている。⑤は、あやめの「根」に久しく会えないことを嘆いて泣く「音」を響かせている。

## 【補説】

ここまで三首が夏歌で、次から秋歌がはじまる。時間の流れとしてはおかしくない一方で、夏歌の題材が「菖蒲」のみに絞られているところが些か不審。一二番歌には郭公が詠まれているもの、それは『高陽院七番歌合』詠の一部で、夏歌三首とは離れて配置されている。秋歌の一首目となる一八番歌が秋も半ばの八月十五日夜であることから、あるいは、夏歌後半から秋歌前半に脱落があつた可能性も考えられようか。

八月十五日夜、関白殿より「月の歌まいらせよ」とありしかば

18 かくばかりさやけき月はいにしへの秋の空にもあらじとぞ見る

【底本】

八月十五日夜関白殿より月の哥まいらせよとありしかはかく許さやけき月はいにしへの秋のそらにもあらじとぞ見る

【他出】

○『続後撰集』秋中・三三五

二条関白家の八月十五夜歌合に 周防内侍

かくばかりさやけき影はいにしへの秋の空にもあらじとぞ見る  
○『万代和歌集』秋上・一〇〇二

月をよみ侍りける 周防内侍

【通釈】  
かくばかりさやけき月はいにしへの秋の空にもあらじとぞ思ふ

八月十五日の夜に、関白殿から「月の歌を献上せよ」とのこと  
でしたので

こんなに明るく清く澄んでいる月は、遠い昔の秋の空にもあるまいと見ております。(今夜の月は、それほどに素晴らしいものです。)

【本歌】

延喜御時八月十五夜、月宴歌 源公忠朝臣

いにしへもあらじとぞ思ふ秋の夜のためしは今宵なりけり  
(新勅撰集・秋・二五五)

【参考歌】

①ここにだに光さやけき秋の月雲の上こそ思ひやられるれ

(拾遺集・秋・一七五・藤原経臣)

②かくばかりさやけく照れる夏の日にわが頂の雪ぞ消えせぬ

(栄花物語・巻第十七 音楽・一九一・頭白き老法師)

③かくばかりあはれさやけき月を見ていかなるよにか見るべかるら

ん (道命阿闍梨集・三〇八)

④かくばかりさやけき月を命あらば又こむ年の今夜もやみむ

(頼政集・二二五)

⑤ひのもとに咲ける桜の色見れば人の国にもあらじとぞ思ふ

(拾遺集・雑春・一〇五〇・平兼盛弟)

⑥千入しむなでしこ貝にしく色は大和唐にもあらじとぞ思ふ

(斎宮貝合・なでしこ貝・一四)

【語釈】

○八月十五日夜：八月十五日の夜に。本詠は、いつどのような催し

のために求められた歌か不明。「八月十五日夜」は中秋の名月の夜。この夜にはしばしば月をめぐる宴が催され、詩歌・管弦が行われた。

八月十五夜を題材とした詠歌例は延喜あたりから見え、『古今和歌六帖』や『和漢朗詠集』に「十五夜」が立項されるなど、その関心

は平安前期から。本歌にあげた公忠詠や、月の光のさやけさを詠んだ①などが八月十五夜を詠んだ早期の例。○関白殿より「月の歌まいらせよ」とありしかば：関白殿から「月の歌を献上せよ」という

お言葉があったので。「関白殿」が誰か不明。周防内侍の生存時期

に関白であったのは頼通〔寛仁三年(一〇一九)〕治暦三年(一〇六七)、後冷泉・後三条・白河、教通〔治暦四年(一〇六八)〕承保二年(一〇七五)、後三条・白河、師実〔承保二年(一〇七五)〕

応徳三年(一〇八七)、白河。寛治四年(一〇九一)〕寛治八年

(一〇九四)、堀河、師通〔寛治八年〕承徳三年(一〇九九)、堀河、忠実〔長治二年(一一〇六)〕嘉承二年(一一〇七)、堀河天皇

の五人。『続後撰集』の詞書に「二条関白」とあることから、

本詠詞書の「関白殿」は大二条殿と呼ばれる教通、あるいは後二条殿とよばれる師通であろうと推定されてきたが、そもそも『続後撰

集』が「二条関白」とした根拠は不明。また、本集八六番詞書には「二条の大殿」との記述があり、「関白殿」と区別する意識があつ

たことも考えられる。本集に採録されている歌々が白河天皇・堀河天皇の時代に詠まれたものを中心としていることや、補説にあげた歌の詞書の類似とその制作年代等から、「関白殿」が師実である可能性を指摘しておきたい。藤原師実（長久三年（一〇四二）〜康和三年（一一〇一）二月一日 六〇歳）は、父が宇治関白頼通、母は藤原種成女祇子。号は京極殿、後宇治殿。撰政太政大臣、従一位に至る。琵琶や笛など音楽の才能に恵まれたほか、歌壇のパトロン的存在として活動し、寛治八年八月には「前太政大臣家和歌合」や『高陽院七番歌合』を主催。他撰家集として『京極大殿御集』『後拾遺集』以下の勅撰集に一六首入集。○かくばかりさやけき月は：こんなに明るく清く澄んでいる月は。八月十五夜に蔵人所の宴で詠まれた①のように、早くから八月十五夜の月は「さやけき」と歌われた。②は初二句が本詠とほぼ共通していることから、本詠との影響関係が想定される。また、本詠と同時代以降には、類似表現を用いた③や④が詠まれている。○いにしへの秋の空にもあらじとぞ見る：遠い昔の秋の空にも、このように素晴らしい月はあるまいと見ております。「あらじとぞ見る」はほかにほとんど用例がないが、「あらじとぞ思ふ」は多数の用例が残る。『万代和歌集』の結句はこの一般化した表現をとって「思ふ」と結ぶ。眼前の景があまりにも素晴らしいため、並ぶものがないことを詠むときに用いられる同時代以前の例として、⑤・⑥や【本歌】にあげた公忠詠がある。なでしこ貝の色の素晴らしさを「大和唐にもあらじ」と空間を見渡してどこにもないことを歌っているのに対し、本詠では「いにしへ」と詠むことで過去から現在へと時間を巡っている。

## 【補説】

一八番歌と類似する詞書を持つ同時代歌人の作として、大江匡房（長久二年（一〇四一）〜天永二年（一一一一））と二条太皇太后宮撰津（生没年未詳）の詠がそれぞれの家集に残されている。

八月十五夜、関白殿より月の歌召したるに  
春日山峰の嵐に雲はれて照る月影をいくよ見つらむ  
（撰津集・九）

関白殿の八月十五夜

ふるさとに今宵の月のかくしあらば錦をきても帰へるばかりぞ  
信濃の守師光、この歌を見て感じておくる歌

みかさ山峰つづき照る月影に知られぬ谷のまつもありけり

（江帥集・九二／九三）

『撰津集』は師実の薨去を契機として編年的な配列で編まれ、師実後の詠を含まないとされている。右に取りあげた九番歌の前後を見てみると、一〜八番歌は師実関連の歌が詠まれ、一〇〜一二番歌には後拾遺集奏覧ころの通俊との贈答歌が配されている。さらに二番歌の詞書にも「関白殿」とあるので、九番歌の「関白」は師実である可能性が高い。

また、『江帥集』九二番歌は、この歌に感銘を受けた信濃守師光の詠が九三番にあるので、九二番歌は師光の活躍期に歌われたとみてよい。源師光の生年は未詳ながら、没は康和二年（一一〇〇）であるので関白は師実か師通が妥当と考えられる。

後の二条殿の八月十五夜、月の宴せさせ給ふとて歌召ししかば参らせし、水上月

秋の夜も氷結ぶと見ゆるまで水のおもしろく照す月影

（康資王母集・二三）

先の二首と同時代の『康資王母集』二三番歌の詞書には「後の二条殿の八月十五夜の宴」と、師通であることがはっきりとしている。

る歌も残る。ただし、こちらでは「水上月」との題が付されていて、本詠と同時のものであるかには疑問が残る。

以上のことから、本詠の詞書に見える「関白」は、師実の可能性があることを指摘しておきたい。

後冷泉院の御時、殿上より「菊の匂ひ風にしるし」といふ題を、大盤所へ参らせたりしかば

19 霧こめて籬の菊は見えねども風に匂ひのほどぞ知らるる

【底本】

後冷泉院の御時殿上よりきくのほひ風にしるしといふたいを  
たいはんところへまいらせたりしかば

きりこめてまかきのきくは見えねども風にほひのほどそしらるゝ

【他出】

○『和歌一字抄』随・菊匂随風・四五八

霧こめて籬の菊は見えねども風に匂のほどぞ知らるる

【通釈】

後冷泉院の御代に、殿上の間より「菊の匂ひ風にしるし」という歌題を、大盤所に差し上げましたので。

霧が深くなって垣根の菊は見えなけれども、(霧の向こうから吹いてくる)風によって菊の香り高さがわかりますよ。

【参考歌】

①己乃己呂乃しづぐれのあめに 志具礼乃阿米爾きくののな 菊乃波奈ちり曾之奴倍岐  
阿多羅蘇乃香乎(日本後紀・卷第六逸文・六・桓武天皇)

天曆御時、小式命婦豊前にまかり侍りける時、大盤所にて餞せさせたまふに、かつげ物たまふとて 御製

②夏衣たちわかるべき今夜こそひとへに惜しき思ひそひぬれ

(拾遺集・別・三〇五)

四条の宮、内大盤所に「これ定めて」とのたまへるに

③鶯の春の初音と郭公夜深く鳴くといづれまされり (朝光集・三五)

④朝ぼらけ家路も見えずたづねこし榎の尾山は霧こめてけり (源氏物語・橋姫・六二六・薫)

⑤霧はれぬあやの河辺になく千鳥声にや友の行くかたを知る (後拾遺集・冬・三八七・藤原孝善)

⑥匂ひくる風にぞしるき秋の野の霧のあなたの花のくさぐさ (有房集・一六六)

⑦春の夜の闇はあやなし梅花色こそ見えね香やはかくるる (古今集・春上・四一・凡河内躬恒)

【語釈】

○後冷泉院の御時：後冷泉天皇の御代に。後冷泉天皇(万寿二年(一一〇二)八月三日〜治暦四年(一一〇六)四月一九日 四四歳)は、後朱雀天皇の第一皇子。母は道長女の尚侍嬉子。諱は親仁。后妃として後一条皇女章子内親王、頼通女寛子、教通女勸子がいたが、子に恵まれなかった。紫式部の娘である大式三位が乳母をつとめた。

天皇のもとでは詩宴が盛んに行われたほか、天徳四年『内裏歌合』を範として内裏歌合の復活をはかった永承四年『内裏歌合』や、『荣花物語』や『古今著聞集』などに当日の様子が記された永承六年『内裏根合』などを主催。寛子の『皇后宮春秋歌合』をはじめとして、その後宮でも歌合が盛行。『後拾遺集』以下の勅撰集に六首入集。

本詠は、寛徳二年(一一〇四)四月に即位して以降の作。○殿上より「菊の匂ひ風にしるし」といふ題を、大盤所へまいらせたりしかば：殿上の間から「菊の匂ひ風にしるし」(菊の匂ひは風によってはつきりとわかる)という歌題を、女房たちの詰めている大盤所に差し上げた。「殿上」は、清涼殿の南廂にある「殿上の間」のこと

で、殿上人の控えの間。「菊の香り風にしるし」に類する題で詠まれた同時代の詠歌はほかにない。『和歌一字抄』は、本詠を「随」

の項にあげて、「菊句随風」（菊の匂ひは風にしたがふ）とする。「菊」は、秋の景物。中国から伝来した植物が賞翫された。和歌に菊が詠まれた早期の用例として、菊の匂いを詠じた①があり、古くから菊の香りに関心が寄せられていた。「大盤所」については四番【語釈】参照。村上天皇が小式命婦に大盤所で餞したときの②や、四条宮が清涼殿の大盤所に集っている人々と歌に興じた折りの③など、大盤所に関連した歌は多い。○霧こめて：霧が深くなつて。「霧」は秋の景物。すぐ近くで濃く立ちこめるものとして詠まれやすい。立ち去りがたい思いを、目の前に霧が深く立ちこめている様子に重ねて詠んだ④がある。また、⑤のように視界を遮る霧の向こうから音が聞こえてくることを歌ったものも。霧の向こうからさまさまな秋の花の匂いが風に運ばれてくることを詠んだ⑥は、本詠から発想を得たか。○籬の菊は見えねども：垣根に咲いている菊は霧のせいで見えないけれども。「籬」は、「ませ」や「ませがき」とも呼ばれる柴や竹で粗く格子を組んだ垣根のことで、植物や花などが傍らに植えられている。○風に匂ひのほどぞしらるる：霧の向こうから吹いてくる風によって菊の香り高さがわかる。ここで詠まれている「匂ひ」は、菊の「香り」だが、そこには菊の花の「美しい色あい」も重ねられている。深い霧の向こうは見えなくても、吹いてくる風の香り高さによって、菊の花が素晴らしく咲き誇るようすがありありと想像される。視界は遮られようとも花の素晴らしい香りは隠しようがないという発想自体は、⑦にみられるように古くからある。

## 【補説】

一八・一九番歌を秋題と位置づけるべきか。ただし、そのように考えるならば冬題が欠けていることになる。

帥大納言、筑紫にと聞きしほどに、遣りし

20 都にも久しくいきの松原のあらば逢うふよも待ちもしてまし

## 【底本】

帥大納言つくしにときもしほどにやりし

みやこにもひさしくいきのまつはらのあらはあふよもまちもしてまし

## 【他出】

○『新統古今集』離別・八八六

大納言経信、大式になりて筑紫へまかりけるに、申しつかはしける 周防内侍

都にも久しくいきの松原のあらばあふよを待ちもしてまし  
○『歌枕名寄』筑前国・老岐松原・九〇二五

都にも久しくいきの松原のあらばあふよを待ちもしてまし

右、大納言経信、大式になりて筑紫へまかりけるに、遣はしけるとなん

## 【通釈】

帥大納言（経信）が、（太宰権帥として）筑紫に（下向する）と耳にした頃に、（周防内侍が歌を）送った。

都にも長く生きるとかいう生の松原があるならば、（あなたとふたび）お目にかかる時をお待ちするでしょうに。

## 【参考歌】

①都へといきの松原いきかへり君が千歳にあはんとすらん

（後拾遺集・雑五・一一二八・源重之）

②苦しきに思ながらぞ遥かなる心つくしにいきの松原

（四条宮下野集・三四）

③思ひきや 身のうき舟に 乗りしより 多くの月日 こがれつつ

いつしか花の 都にて 心ほかに ありへしも （中略） かかる海松布を かげきつつ よに潮垂るる 水屑にて あはれにい

きの 松原の 久しくなれる 我が身には

（後略）  
（高遠集・二二九）

④いかにしてしばし忘れん命だにあらば逢ふよのありもこそすれ

(拾遺集・恋一・六四六・よみ人知らず)

⑤長らへてあらば逢ふよも待つべきに命は尽きぬ人はとひ来ず

(狭衣物語・二一〇・飛鳥井の女君)

⑥み吉野の山より落つる滝つ瀬の早くなりせば待ちもしてまし

(元良親王集・一四八)

### 【語釈】

○帥大納言、筑紫にと聞きしほどに、遣りし：帥大納言(経信)が、筑紫に下向すると聞いたところに、周防内侍が詠み送った歌。「帥大納言」は源経信のこと。源経信(長和五年(一〇一六)〜永長二年(一一〇九七)閏正月六日 八二歳)は、源道方の六男、母は源国盛女。桂大納言とも。妻は四条宮土佐内侍。子は俊頼など。治暦三年(一一〇六七)に参議。延久四年(一一〇七七)年に正二位。寛治五年(一一〇九一)に大納言となる。寛治八年(一一〇九四)に太宰権帥のぞみ、筑紫に下つて同地で没した。和歌、漢詩、管弦の三才を謳われた人物で、永承四年(一一〇四九)の『内裏歌合』など、晴儀歌合の代表歌人となる。寛治八年の『高陽院七番歌合』の判者で、康資王母との応酬で知られる。琵琶の名手としても著名で桂流の祖。『後拾遺集』の撰者に選ばれず、『難後拾遺』を著した。『後拾遺集』以下の勅撰集に八三首入集。『本朝無題詩』・『本朝統文粹』・『朝野群載』などに漢詩が多数残る。家集は『経信集』。本詠は、経信が太宰権帥に任命された翌年——嘉保二年(一一〇九五)、筑紫に下向する直前あたりに詠まれた。○都にも久しくいきの松原の：都にも長いこと生きるとかいう、生の松原が。「生の松原」は、筑前国の歌枕で、現在の福岡市西区にある今津湾沿岸あたりにみえる白砂青松の景勝地。神功皇后が新羅に向かうときに松の枝をさして、無事に帰つてこられるなら生きておくれと祈つたとの伝承が残る。筑前に下向する人や、それを見送る人の歌に詠まれた。この地は、①や

②のように「生の松原」と「行き」が掛けられる。「久しくいきの

松原」という句の先行例は見えない。「生の松原」を句をまたいで用いる例は、筑紫から京へ上つてくることを詠んだ長歌③に見えるのみ。本詠は、長く「生き」と、地名としての「生の松原」が掛けられている。また、「松原」には、あなたを「待つ」が響いている。

○あらば逢ふ世も：生の松原があるならば、あなたと再びお目にかかる時も。「あらば」は上の句に接続して、京の都にも「生の松原」があるならばと仮定をしている。第四句の用例自体は少なくないものの、先行例としては④が残るのみ。また、「長らへて」と詠み出し、「あらば逢ふよも待つ」と言葉が続いていく⑤は、本詠との影響関係を感じさせる。○待ちもしてまし：あなたのお帰りをお待ちするでしように。自分たちの年齢を考えると、再会することは難しいだろうという思いがこめられている。この句の先行例としては、親王のお出でを待ちきれず夫を持った女が詠んだ⑥がある。

### 【補説】

周防内侍と経信の交流が見られるのは、経信の下向に際して行われたこの贈答歌のみである。経信は出羽弁や伊勢大輔などさまざまな女房たちと贈答を行っており、周防内侍との贈答もそうした社交の一環と考えられる。

ここからしばらく男性官人との贈答が続いていく。これらのうち、二〇〜二四番歌は恋歌とみることも可能な歌となっている。本詠以降は四季を離れて、より人事に重きをおいてまとめようとしたのであろう。

〔付記〕翻刻を許可してくださいました 公益財団法人 冷泉家時雨亭 文庫に深謝申し上げます。